
突発企画 掛け合い漫才を作ろう

すいかちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

突発企画 掛け合い漫才を作ろう

【Zコード】

Z9176P

【作者名】

すいかちゃん

【あらすじ】

全く考えません

書きながら考えます

アドリブならではの面白さが出せたらなって思つてゐる

とりあえず主人公の名前を決める所から

プロトタイプ（前書き）

未だに考えついてない
ジャンルも決めてない
でも、楽しくしたいって気持ちは本物なのです
私の指が打ちつかれる前に方針を決めることが出来ますように

プロトタイプ

れて。

こいつして小説というものを書いてみようと試みているわけだが、このお話（と呼んでいいものなのか？）は、しばらくの間、私作者の思考をたどつていくといつ実につまらない出だしになつていてるわけだ。

もちろん面白いものを作ろうとこう気持ちはあるんだよ。
でも、何も決めていないまつさらな状態だから、自分自身にも、何を書いていいのか分かつてない節があるんだ。
面白くなるかどうかもわからないしね。
とにかく書いていくしかないわけだな。こりや。

まず、この話のテーマは掛け合い漫才だ。
漫才をするには人がいる。キャラクターだ。

どうせなら男の子と女の子がいるといい。

性別の差を意識したら自然とキャラ付けもうまく行くと思つんだ。

まずは彼らがどんな人なのか考えて行こ。

まずはやつぱり、女の子。

感情移入がしやすくて、男性の読者が思わず惚れてしまつて。
そんな女の子がいいな。

ギャル？ ビッチ？ それはそれで楽しそうだけど、最初に作る女の子
がそんなんじゃダメだ。

でもビッちしたらそんな性格の女の子になるだろ。

まず、毛虫を怖がる。これは第一条件。
人間には欠点がなくちゃいけないよ。

そこを補うことでなんかこう、話が広がるじゃん。

そして、天真爛漫でポジティブ。

ネガティブはダメだ、じめじめするもの。

過去に隠されたトラウマがあつたりすると、守つてあげたくなるんだろうけど、後付け設定にならないように最初から入念に作らなきやな。

次は男の子。

これまた、感情移入しやすく、面白い子がいいな。
幾つぐらいだろ？まだ10代がいいな。ちょっと子供の部分が残ってるんだ。

怒りっぽなくて、優しい人がいいよ。
ちょっとぐらい悪戯が好きじゃないと。

頭はいい方がいいな。やっぱり機転がきく人ってすげいもの。

よし、最初はこんなもんでいいや。

とにかくキャラクターを固めないと。
ネット小説でよく見る、男「女」って感じで、とにかく会話をさせてみよう。

男「こんにちは 僕男っていうんだ よろしくね」

女「あたし女 こいつちこをよろしく」

男「僕たち、いまからちょっととした寸劇をしなきゃいけないんだって」

女「寸劇？いきなりな話だよね 台本はあるの？」

男「それが、ないんだよ 完全なアドリブなんだ」

女「ええつ、そんなの、失敗できないじゃない」

男「大丈夫だよ 失敗したって、胸を張つて続きをすればいいんだ

真剣にやってたら、誰かがクスつて笑ってくれるよ」

女「そうだね まずはやつてみなきゃ始まらないよ」

男「よし、その意氣だ ジャあ、スタッフさん、僕たち準備できましたんで」

スタッフ「オケイ一では、シーン一、初めッ！」

いきなり第二者が加入してきちゃったよ。

どうやら、この話はいきなり集まって寸劇をすることになる一人組の話になるらしい。

何で寸劇をしなきゃいけないのか。

そもそも舞台はどこにあるのか。

スタッフがいるという事は、誰かに公開するものなのか。

まだ、全然考えられてない。

こんな出だしでも、面白い小説が書けるんだろうつか。

すこく不安だけどとりあえず第一話はここまで。

読んでくれてありがとつ。

プロトタイプ（後書き）

最後まで書けたら書く

試運転（前書き）

そんなこんなで見切り発車したこの小説（？）

次はどうな展開にしようかな。

そろそろ、キャラクターを固める必要があると思つたんだ。

試運転

カンカンカン……。

暗い洞窟の中を、二人分の足音が反響する。

一つは、底の硬いブーツの足音。

もう一つは、鋭いヒールの足音。

足元もおぼつかない闇の中、男と女、二人組が走っていた。

一人の息は荒い。

ただ事ではない様子で駆けている。

もうかなりの距離を走ったのか、一人とも頬を赤くし、汗だくだ。

「きやあっ！」

いきなり、女性の方が足をもつれさせ、転んだ。

「大丈夫かっ！」

男は、すぐに振り返ると女の二の腕をつかみ、引き起しす。

「痛いッ！」

よろけた女の悲痛な声が洞窟内に反響した。

「どうしよう、ぐじいちゃつたみたい……」

「そんな！」

男が、焦りをあらわに歯がみした。

「よし、乗れ！」

短く叫ぶと男は、女に背を向け、しゃがみ込む。

「でも……あなただけでも逃げなくちゃ」

「いいから来いッ！」

女の弱弱しい声を遮つて、男が叫んだ。

女ははじかれたように男の背中にしがみつく。

男は、女を背負つて再び走りだした。

しかし、さすがに人一人背負つてそのままのペースで走ることはできない。

「ふツ、ふツ……」

男は歯をくいしばりながら一歩一歩と足を出すものの、滝のよう汗を流し、苦しそうに動く。

「……つ、ぐすつ……」

女は、初めこそ大人しく背負われているものの、やがて鼻をすすぐだした。

「おい、何で泣くんだよ！」

男が、荒い息を吐きながら問いかける。

「だつて、このまま私を背負つたままだと、あいつらに追いつかれちゃうよ……。私一人が捕まるんじゃなくて、君まで捕まつてひどい目にあわされたら、私すごく悲しいし、申し訳なくなる……」

「ばかじやねえのつ！？」

洞窟の中、これまで以上に厳しい男の声が反響した。

「じゃあ、俺はお前を置いていけばいいってのか？ あいつらにどんな目にあわされるかもわからないのに…？」冗談じやねエ！

「だつて……」

「だつてじやねエ！ お前だつてまだ捕まりたいわけじゃないだろ！」

「それは、そうだけど…… 人の人生まで私の勝手で狂わせたくないよッ！」

「そうだな……自分のせいで誰かが辛い目にあうほど、耐えがたいことはないよ……。俺にだつて、自分のせいでチームが負けたことがあるからよくわかる。でも、俺はお前を置いていってお前がいくなる方がよっぽど悲しいんだ」

「……！ でも」

「分かれとは言わない。」これは俺のHITなんだ！

それ以上女は泣かなかつた。

男はよろける足取りで、一步一歩進んでいく。

しかし無情にもその背中に迫りくる、凶悪な黒い影があつたのだった……。

試運転（後書き）

メタ要素入れる隙間が無くなつた
いつになつたら漫才になるのか

次の話は新キャラ登場のはず

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9176p/>

突発企画 掛け合い漫才を作ろう

2011年1月9日02時05分発行